

契丹文字談義

—契丹語の隨瑰（門）と討賽咄呢（重午日）—

吉池孝一

東アジアの解読が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話。登場人物の設定は次のとおり。

佐藤久美<sup>きとうくみ</sup>：学生。ツングース系民族の歴史に関心があり金朝史と清朝史を学んでいる。満洲語の講義に出ている。

山村健一<sup>やまむらけんいち</sup>：学生。いろいろな言葉と文字に関心があり、言語学を学んでいる。モンゴル語の講義に出ている。

安井教授<sup>やすい</sup>：漢文の教員。古文字資料の収集を趣味としている。学生とともに契丹文字・契丹語の勉強会を始めた。

・・・・・卓上に本が一冊ある・・・・

漢字音訳契丹語

安井教授：これは『遼史』<sup>1</sup>です。最後尾の卷百十六に「国語解」が付されています。ここで言う「国語」とは契丹語のことです<sup>2</sup>。漢字で音訳した契丹語があり、その下に意味の解説があります。佐藤さん幾つか単語を拾ってください。

・・・・・・

佐藤久美：2つばかりですが。

- ・「隨瑰 門名，遼有隨瑰部。」 隨瑰、門の名。遼に隨瑰部有り。
- ・「討賽咄呢 重午日也。」 討賽咄呢、重午の日也。

安井教授：契丹文字で書かれた契丹語を勉強する前に、漢字で音訳された契丹語をとおして契丹語がどのような言葉か確認しましょう。

<sup>1</sup> 百衲本二十四史『遼史』臺灣商務印書館、1988年6版による。

<sup>2</sup> 古屋昭弘(2007)「漢字文化圏と「国語」」『月刊言語』2007(1)、32-40頁に、“「国語」は、やはり漢人的発想、あるいは漢化した異民族の知識人の発想の中で生まれた術語と考えるのが自然である。「本国語」「本国之語」「本国語言」（自国の言葉、当該の国の言語）と同じような発想でできたものであろう。更にもう一度よく見直してみると、中国の「国語」は、異民族と関係があることはもちろん、その当初から教育や学習と密接な関係にあることがわかる。”(35頁)とある。「国語」という名称と、鮮卑語・契丹語・女真語など具体的な言語名との関係について明らかにする。

## 墮瑰（門）諸説

安井教授：契丹語「墮瑰」の検討から始めましょう。

「墮瑰 門名，遼有墮瑰部。」 墮瑰、門の名。遼に墮瑰部有り。

山村健一：これまでにどのような解説がありますか。

安井教授：比較的早いものに白鳥庫吉(1910-1913 ; 1970)<sup>3</sup>があります。これには中国語の訳本もあり広く利用されています<sup>4</sup>。『遼史』だけでなく様々な文献資料から漢字音訳契丹語 108 種を抽出し解釈を加えます。その内、9 番目にこの単語をあげ次のように述べます。

さて満洲語にては門を duka といひ、女真語にては之を都哈といふ (Grube. p. 11)。契丹語の墮瑰は明らかにこの duka の對音なり。 (249-250 頁)

佐藤久美：引用文に“満州語”とあるのは満州語文語のことだと思います。グルーベ氏の文献をあげているので、女真語“都哈”は、明代の女真館訳語の漢字音訳女真語でしょう。

安井教授：佐藤さんは金朝史と清朝史に関心がありましたね。研究の為に満州語文語をやっているということなので心強いです。白鳥氏以外に、孫伯君・聶鴻音(2008)<sup>5</sup>があります。当該書は、墮瑰が出る文献を幾つかあげ、白鳥氏の説を紹介します。なお、契丹語の音形を\*dögü と復元します。

白鳥庫吉《東胡民族考》認爲“墮瑰”與女真語“都哈”、滿語 duka 相當，意爲“門”。此説極是，《女真譯語・宮室門》：“都哈，門。” (62 頁)

## 検討用の資料

安井教授：検討に使う資料を図書館から借りてきました。契丹語が何語に近いのか、相談をしながら調べてください。

### ■モンゴル系言語

現代モンゴル語：現代モンゴル語辞典（小沢重男）<sup>6</sup>。モンゴル語音韻論（Svantesson。付 13 言語の語彙比較表）<sup>7</sup>。中国少数民族語言簡誌叢書。

古モンゴル語：『元朝秘史』傍訳漢語索引（栗林 均）<sup>8</sup>。パスパ字モンゴル語

<sup>3</sup> 白鳥庫吉(1910-1913; 1970)「東胡民族考」『史學雜誌』21 編～24 編。(1970)『白鳥庫吉全集 第四卷』岩波書店、63-320 頁による。

<sup>4</sup> 白鳥庫吉著・方壯猷譯(1934)『東胡民族考』上海：商務印書館。

<sup>5</sup> 孫伯君・聶鴻音(2008)『契丹語研究』北京：中国社會科學出版社。

<sup>6</sup> 小沢重男編著(1983)『現代モンゴル語辞典』大学書林。

<sup>7</sup> Svantesson, J.-O. (2005; 2008) *The Phonology of Mongolian*. Oxford University Press, New York, paperback 2008.

<sup>8</sup> 栗林 均(2012)『『元朝秘史』傍訳漢語索引』東北大学東北アジア研究センター。

碑文 (Tumurtogoo) <sup>9</sup>。

■ ツングース系言語

現代ツングース語：中国少数民族語言簡誌叢書（赫哲語<sup>10</sup>、鄂倫春語<sup>11</sup>、鄂温克語<sup>12</sup>、錫伯語<sup>13</sup>）。

古ツングース語：新滿漢大詞典（胡增益）<sup>14</sup>。滿洲語文語辞典（福田昆之）<sup>15</sup>。女真文辞典（金啓琮）<sup>16</sup>。

漢字音訳契丹語の漢字の発音は藤堂明保(1978)<sup>17</sup>に拠りましょう。親字に、詩経時代の音（上古音）、隋唐時代の音（中古音）、元代『中原音韻』の音（近世音）、北京語音（現代音）の4種が付されています。遼代の漢字音としては、元代の近世音を利用して大過ないでしょう。場合によっては中古音も参考にしてください。

.....

## 墮瑰（門）検討

安井教授：それでは佐藤さん、墮瑰の検討をお願いします。

佐藤久美：墮瑰（門）の近世音は tuo-kuai です。

■現代モンゴル諸語：ハルハ方言 үүд (uud) と хаалга (xaalga)。バーリン方言 xaalək。ブリヤート語 xaalgə。カルムイク語 xaalg。ダグール語 xaalək。シラ・ユグル語 xaalka。モンゴオル語 xaalqa。

中期モンゴル語：（元朝秘史）額兀闐 (e<sup>l</sup>üten) と<sup>甲</sup>合阿<sup>楊[勒]</sup>\*<sup>甲</sup>合 (qa<sup>l</sup>alqa)。  
\*楊は勒の誤

中期モンゴル語：（パスパ字碑文）q<sup>l</sup>-q (qa<sup>l</sup>alqa)。

■現代ツングース諸語：鄂倫春語 urkə。鄂温克語 uxxə と xaalga。錫伯語 utei。

滿洲語文語：duka（門、城門）と uche(уфə)（房門、小門）。

女真館訳語の女真語：都哈 (dusa 又は duka)。

<sup>9</sup> Tumurtogoo, D. (2010) *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

<sup>10</sup> 安 俊(1986)『赫哲語簡誌』北京：民族出版社。

<sup>11</sup> 胡增益(1986)『鄂倫春語簡誌』北京：民族出版社。

<sup>12</sup> 胡增益・朝 克(1986)『鄂温克語簡誌』北京：民族出版社。

<sup>13</sup> 李樹蘭・仲 謙(1986)『錫伯語簡誌』北京：民族出版社。

<sup>14</sup> 胡增益主編(1994)『新滿漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。

<sup>15</sup> 福田昆之編(1987)『滿洲語文語辞典』横浜：FLL。

<sup>16</sup> 金啓琮(1984)『女真文辞典』北京：文物出版社。

<sup>17</sup> 藤堂明保編(1978)『学研漢和大字典』学習研究社。有気音（帶気音）の表記<sup>o</sup>は<sup>o<sup>h</sup></sup>に変更する。

山村健一： 隗 瑰（門） tuo-kuəi は、モンゴル諸語と異なり、ツングース系の女真語と満洲語文語の duka にほぼ対応しますね。

安井教授： 当初は契丹語の系統もツングース系とされた時期がありました。その後、モンゴル系であろうということになり、現在に至っています。

山村健一： ツングース諸語の、鄂倫春語 urkə、鄂温克語 uxxə、錫伯語 utei、満洲語文語 uche(ufə) は、“共通する語形” から出た単語で、満洲語文語の uche(ufə)に相当すると見て間違いないでしょう。鄂温克語の xaalga はモンゴル語からの借用語です。問題は、満洲語文語の uche(ufə)と、満洲語文語・女真語の duka の違いが、どういう性質のものかという点です。佐藤さん、どうでしょう。

佐藤久美： 漢語の訳からも想像できるのですが、新満漢大詞典（胡増益）の例文を読みましょう。 uche(ufə)には「 uche(門) be(を) chobalame(こじって) neimbi(開ける).」（戸をこじ開ける）とあります。 Duka には「 ini(その、彼女の) amha(岳父は) hoton(城) i(の) wargi(西) dukai(門の) dolo(中に) tehe(住んだ).」（岳父は城壁の西門の内に住んだ）とあります。これによると、 uche(ufə)は日常語で、 duka はやや文化的な語と見て良いのでしょうか。

山村健一： そうすると、 duka は文化的な言葉として、女真人が契丹語から借用し、それが満洲語文語に伝わったということになりますね。

佐藤久美： 契丹（遼）の勢力が拡大したとき、女真人は東北の隅にいて、契丹人に支配されていたわけですから、文化的な語の借用の方向としては、女真人が契丹語を借用するのは自然です。ところで、契丹語の語形が、モンゴル諸語の語形ともツングース諸語の基本語形とも異なるということは、契丹語の隗 瑰（門）はモンゴル系の言葉でもツングース系の言葉でもないということになりますね。



金建国（1115年）の前、1111年の状況<sup>18</sup>

※遼の北辺の勢力範囲は不明。便宜的に中華人民共和国の国境線を用いた

<sup>18</sup> 譚其驥主編(1982)『中国歴史地図集 第六冊』上海：地図出版社。

山村健一：墮瑰（門）*tuo-kuai* という“単語について”はそういうことになるのでしょう。

安井教授：皆さんの考えは、①契丹語「墮瑰（門）」はモンゴル系の諸語にはない契丹語独自の単語で、②それが女真人によって借用され、満洲語文語に引き継がれたということですね。そうすると、女真語にも *duka* の他に、満洲語文語の *uche* (*uʃə*) に相当する語があったかもしれませんね。次に討賽咄咄について、山村君お願いします。なお討賽咄咄については『遼史』卷五十三にも出ています<sup>19</sup>。討は五で、賽咄咄は月のようです。参考にしてください。

五月重五日・・・・・・國語謂是日爲討賽咄咄、討五、賽咄咄月也。

五月重五日 国語でこの日を討賽咄咄と謂う。討は五で賽咄咄は月である。

### 討賽咄咄（重午日）諸説

安井教授：討賽咄咄は、『遼史』卷五十三によると、討（五）と賽咄咄（月）からなる語であることが分かります。

討賽咄咄、討五、賽咄咄月也。討賽咄咄、討は五で賽咄咄は月である。

なお、白鳥庫吉(1910-1913 ; 1970)には、討と賽咄咄について次のようにあり、両者ともにモンゴル語系統の語とします。

蒙古語族の中、長城附近の蒙古語にては五を *tabun*、Khalkha 語にて *tabu*、Ölöt 語にて *tabù*, *tabun* (Klap. : *A. P.* p.284)、Dakhur 語にて *tábu*, *taághu*, *táwan* (Iwanowski. p. 69. a)、Buryat 語にて *taban*, *tabun* (Podgorbunski. p. 256. b) といへば。契丹語の討は上の *tabu*, *táwan* の轉訛せるものなり。 (264 頁)

さて蒙古語にて月を *sara*, *saran* といひ、Tunkinsk 方語、Balagansk 方語、Aralsk 方語に *gkhara* (*khara*, *kh=s*) (Podgorbunski. p. 148. a)、Dakhur 語に *sára*, *saróro* (Iwanowski. p. 65) といへば、契丹語の賽離は正しく此の對音なり。但その一譯に賽咄咄ともあるによりて之を考ふるに契丹の一方語にては月を *saira* などといひしならん。朝鮮語にて月を *tal* といふは、蒙古語 *sara* の轉音と知るべし。 (265 頁)

孫伯君・聶鴻音(2008)も討\**taw* と賽咄咄\**seri* につき、各種の語例を挙げモンゴル諸語と同じとします。

### 討（五）検討

<sup>19</sup> 『遼史』卷五十三の例は、古屋昭弘(2007)で「国語」の用例の一つとして紹介されている。

山村健一：討（五）の近世音は t<sup>h</sup>au です。モンゴル諸語とツングース諸語の五は次のとおりです。

■現代モンゴル諸語：ハルハ方言 tab (t<sup>h</sup>aw)。チャハル方言 t<sup>h</sup>ap。バーリン方言 t<sup>h</sup>ap。ブリヤート語 t<sup>h</sup>abən。ハムニガン語 t<sup>h</sup>apɔ。カルムイク語 t<sup>h</sup>awn。ダグール語 t<sup>h</sup>aawə。シラ・ユグル語 t<sup>h</sup>aawɣn。モンゴール語 t<sup>h</sup>aawun。サンタ（ダウンシャン）語 t<sup>h</sup>awuŋ。バオアン語 t<sup>h</sup>awoŋ。カンジャ語 t<sup>h</sup>awun。モゴール語 taban。

中期モンゴル語：（元朝秘史）塔奔（tabun）。

中期モンゴル語：（パスパ字碑文）t<sup>h</sup>-bun（tabun）。

■現代ツングース諸語：赫哲語 sundza。鄂倫春語 tonŋa と ʃundʒaa（月名の 5）。鄂温克語 tonŋa と ʃundʒa（月名の 5）。錫伯語 sundza。

満洲語文語：sunzha（sundʒa）。

女真館訳語の女真語：順扎（ʃundʒa）

佐藤久美：契丹語の討（五） t<sup>h</sup>au はモンゴル諸語、とくにハルハ方言に近いようです。もつとも、語中に子音 -b- もしくは弱化した -w- がある諸語が少なくなく、その点は契丹語と異なります。

山村健一：漢字音「討」 t<sup>h</sup>au の au は降り二重母音で a と u の間には何もありません。中期モンゴル語では tabun のように -b- があることから、契丹語はこの -b- が脱落したように見えますね。

安井教授：その点について、Janhunen(2003; 2011)<sup>20</sup>は契丹小字を利用して指摘しています。

In the Khitan Small Script, the word for ‘five’ is written with an isolated syllabic sign, while the word for ‘hare’ is written as a block of three signs, the first of which is identical with the sign for ‘five’. Of all language families in the region, this pun makes sense only in Mongolic, where ‘five’ is \*tabu/n and ‘hare’ is \*taulai. Obviously, the same syllabic sign was used to write the Khitan equivalents of both the \*tabu- of ‘five’ and the \*tau- of ‘hare’. However, these elements are not identical in Proto-Mongolic. They may also not have been identical in Khitan, but this would mean that the writing system was phonologically rather inexact. A more likely possibility is that they were identical in Khitan (perhaps to be read as tau), which, on the other hand, would prove that Khitan was characterized by phonological innovations different from Poto-Mongolic. (p.395)

<sup>20</sup> Janhunen, J. (2003; 2011) “Para-Mongolic”, in Juha Janhunen (ed.), *The Mongolic Languages*, Routledge, London and New York, paperback 2011, pp.391-402.

佐藤久美：契丹小字のフォントがないので説明が呑み込めません。

安井教授：契丹小字の部分、読みにくいかもしれませんね。漢字音訳契丹語と契丹小字を提示すると次のようなことです。五の漢字音訳契丹語は討で契丹小字は𐰞です。兎の漢字音訳契丹語は陶里で契丹小字は𐰞𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿𐱀𐱁𐱂𐱃𐱄𐱅𐱆𐱇𐱈𐱉𐱊𐱋𐱌𐱍𐱎𐱏𐱐𐱑𐱒𐱓𐱔𐱕𐱖𐱗𐱘𐱙𐱚𐱛𐱜𐱝𐱞𐱟𐱠𐱡𐱢𐱣𐱤𐱥𐱦𐱧𐱨𐱩𐱪𐱫𐱬𐱭𐱮𐱯𐱰𐱱𐱲𐱳𐱴𐱵𐱶𐱷𐱸𐱹𐱺𐱻𐱼𐱽𐱾𐱿𐲀𐲁𐲂𐲃𐲄𐲅𐲆𐲇𐲈𐲉𐲊𐲋𐲌𐲍𐲎𐲏𐲐𐲑𐲒𐲓𐲔𐲕𐲖𐲗𐲘𐲙𐲚𐲛𐲜𐲝𐲞𐲟𐲠𐲡𐲢𐲣𐲤𐲥𐲦𐲧𐲨𐲩𐲪𐲫𐲬𐲭𐲮𐲯𐲰𐲱𐲲𐲳𐲴𐲵𐲶𐲷𐲸𐲹𐲺𐲻𐲼𐲽𐲾𐲿𐳀𐳁𐳂𐳃𐳄𐳅𐳆𐳇𐳈𐳉𐳊𐳋𐳌𐳍𐳎𐳏𐳐𐳑𐳒𐳓𐳔𐳕𐳖𐳗𐳘𐳙𐳚𐳛𐳜𐳝𐳞𐳟𐳠𐳡𐳢𐳣𐳤𐳥𐳦𐳧𐳨𐳩𐳪𐳫𐳬𐳭𐳮𐳯𐳰𐳱𐳲𐳳𐳴𐳵𐳶𐳷𐳸𐳹𐳺𐳻𐳼𐳽𐳾𐳿𐴀𐴁𐴂𐴃𐴄𐴅𐴆𐴇𐴈𐴉𐴊𐴋𐴌𐴍𐴎𐴏𐴐𐴑𐴒𐴓𐴔𐴕𐴖𐴗𐴘𐴙𐴚𐴛𐴜𐴝𐴞𐴟𐴠𐴡𐴢𐴣𐴤𐴥𐴦𐴧𐴨𐴩𐴪𐴫𐴬𐴭𐴮𐴯𐴰𐴱𐴲𐴳𐴴𐴵𐴶𐴷𐴸𐴹𐴺𐴻𐴼𐴽𐴾𐴿𐵀𐵁𐵂𐵃𐵄𐵅𐵆𐵇𐵈𐵉𐵊𐵋𐵌𐵍𐵎𐵏𐵐𐵑𐵒𐵓𐵔𐵕𐵖𐵗𐵘𐵙𐵚𐵛𐵜𐵝𐵞𐵟𐵠𐵡𐵢𐵣𐵤𐵥𐵦𐵧𐵨𐵩𐵪𐵫𐵬𐵭𐵮𐵯𐵰𐵱𐵲𐵳𐵴𐵵𐵶𐵷𐵸𐵹𐵺𐵻𐵼𐵽𐵾𐵿𐶀𐶁𐶂𐶃𐶄𐶅𐶆𐶇𐶈𐶉𐶊𐶋𐶌𐶍𐶎𐶏𐶐𐶑𐶒𐶓𐶔𐶕𐶖𐶗𐶘𐶙𐶚𐶛𐶜𐶝𐶞𐶟𐶠𐶡𐶢𐶣𐶤𐶥𐶦𐶧𐶨𐶩𐶪𐶫𐶬𐶭𐶮𐶯𐶰𐶱𐶲𐶳𐶴𐶵𐶶𐶷𐶸𐶹𐶺𐶻𐶼𐶽𐶾𐶿𐷀𐷁𐷂𐷃𐷄𐷅𐷆𐷇𐷈𐷉𐷊𐷋𐷌𐷍𐷎𐷏𐷐𐷑𐷒𐷓𐷔𐷕𐷖𐷗𐷘𐷙𐷚𐷛𐷜𐷝𐷞𐷟𐷠𐷡𐷢𐷣𐷤𐷥𐷦𐷧𐷨𐷩𐷪𐷫𐷬𐷭𐷮𐷯𐷰𐷱𐷲𐷳𐷴𐷵𐷶𐷷𐷸𐷹𐷺𐷻𐷼𐷽𐷾𐷿𐸀𐸁𐸂𐸃𐸄𐸅𐸆𐸇𐸈𐸉𐸊𐸋𐸌𐸍𐸎𐸏𐸐𐸑𐸒𐸓𐸔𐸕𐸖𐸗𐸘𐸙𐸚𐸛𐸜𐸝𐸞𐸟𐸠𐸡𐸢𐸣𐸤𐸥𐸦𐸧𐸨𐸩𐸪𐸫𐸬𐸭𐸮𐸯𐸰𐸱𐸲𐸳𐸴𐸵𐸶𐸷𐸸𐸹𐸺𐸻𐸼𐸽𐸾𐸿𐹀𐹁𐹂𐹃𐹄𐹅𐹆𐹇𐹈𐹉𐹊𐹋𐹌𐹍𐹎𐹏𐹐𐹑𐹒𐹓𐹔𐹕𐹖𐹗𐹘𐹙𐹚𐹛𐹜𐹝𐹞𐹟𐹠𐹡𐹢𐹣𐹤𐹥𐹦𐹧𐹨𐹩𐹪𐹫𐹬𐹭𐹮𐹯𐹰𐹱𐹲𐹳𐹴𐹵𐹶𐹷𐹸𐹹𐹺𐹻𐹼𐹽𐹾𐹿𐺀𐺁𐺂𐺃𐺄𐺅𐺆𐺇𐺈𐺉𐺊𐺋𐺌𐺍𐺎𐺏𐺐𐺑𐺒𐺓𐺔𐺕𐺖𐺗𐺘𐺙𐺚𐺛𐺜𐺝𐺞𐺟𐺠𐺡𐺢𐺣𐺤𐺥𐺦𐺧𐺨𐺩𐺪𐺫𐺬𐺭𐺮𐺯𐺰𐺱𐺲𐺳𐺴𐺵𐺶𐺷𐺸𐺹𐺺𐺻𐺼𐺽𐺾𐺿𐻀𐻁𐻂𐻃𐻄𐻅𐻆𐻇𐻈𐻉𐻊𐻋𐻌𐻍𐻎𐻏𐻐𐻑𐻒𐻓𐻔𐻕𐻖𐻗𐻘𐻙𐻚𐻛𐻜𐻝𐻞𐻟𐻠𐻡𐻢𐻣𐻤𐻥𐻦𐻧𐻨𐻩𐻪𐻫𐻬𐻭𐻮𐻯𐻰𐻱𐻲𐻳𐻴𐻵𐻶𐻷𐻸𐻹𐻺𐻻𐻼𐻽𐻾𐻿𐼀𐼁𐼂𐼃𐼄𐼅𐼆𐼇𐼈𐼉𐼊𐼋𐼌𐼍𐼎𐼏𐼐𐼑𐼒𐼓𐼔𐼕𐼖𐼗𐼘𐼙𐼚𐼛𐼜𐼝𐼞𐼟𐼠𐼡𐼢𐼣𐼤𐼥𐼦𐼧𐼨𐼩𐼪𐼫𐼬𐼭𐼮𐼯𐼰𐼱𐼲𐼳𐼴𐼵𐼶𐼷𐼸𐼹𐼺𐼻𐼼𐼽𐼾𐼿𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐾀𐾁𐾃𐾅𐾂𐾄𐾆𐾇𐾈𐾉𐾊𐾋𐾌𐾍𐾎𐾏𐾐𐾑𐾒𐾓𐾔𐾕𐾖𐾗𐾘𐾙𐾚𐾛𐾜𐾝𐾞𐾟𐾠𐾡𐾢𐾣𐾤𐾥𐾦𐾧𐾨𐾩𐾪𐾫𐾬𐾭𐾮𐾯𐾰𐾱𐾲𐾳𐾴𐾵𐾶𐾷𐾸𐾹𐾺𐾻𐾼𐾽𐾾𐾿𐿀𐿁𐿂𐿃𐿄𐿅𐿆𐿇𐿈𐿉𐿊𐿋𐿌𐿍𐿎𐿏𐿐𐿑𐿒𐿓𐿔𐿕𐿖𐿗𐿘𐿙𐿚𐿛𐿜𐿝𐿞𐿟𐿠𐿡𐿢𐿣𐿤𐿥𐿦𐿧𐿨𐿩𐿪𐿫𐿬𐿭𐿮𐿯𐿰𐿱𐿲𐿳𐿴𐿵𐿶𐿷𐿸𐿹𐿺𐿻𐿼𐿽𐿾𐿿𐾀𐾁𐾃𐾅𐾂𐾄𐾆𐾇𐾈𐾉𐾊𐾋𐾌𐾍𐾎𐾏𐾐𐾑𐾒𐾓𐾔𐾕𐾖𐾗𐾘𐾙𐾚𐾛𐾜𐾝𐾞𐾟𐾠𐾡𐾢𐾣𐾤𐾥𐾦𐾧𐾨𐾩𐾪𐾫𐾬𐾭𐾮𐾯𐾰𐾱𐾲𐾳𐾴𐾵𐾶𐾷𐾸𐾹𐾺𐾻𐾼𐾽𐾾𐾿𐿀𐿁𐿂𐿃𐿄𐿅𐿆𐿇𐿈𐿉𐿊𐿋𐿌𐿍𐿎𐿏𐿐𐿑𐿒𐿓𐿔𐿕𐿖𐿗𐿘𐿙𐿚𐿛𐿜𐿝𐿞𐿟𐿠𐿡𐿢𐿣𐿤𐿥𐿦𐿧𐿨𐿩𐿪𐿫𐿬𐿭𐿮𐿯𐿰𐿱𐿲𐿳𐿴𐿵𐿶𐿷𐿸𐿹𐿺𐿻𐿼𐿽𐿾𐿿

山村健一：ヤンフネン氏は、慎重な表現をとりながら、契丹語はモンゴル祖語 (Poto-Mongolic) よりも音の改新が進んでいると述べているようですね。たしかに-bの脱落に関して、契丹語の tau は、後代の中期モンゴル語 (元朝秘史やパスパ字碑文) の tabun よりも音の改新が進んでおり、現代のハルハ方言に近いように見えます。

tabu > tau (契丹語)

tabu > tabu (モンゴル祖語)

佐藤久美：私には納得できないのですが。事実として私たちに見えるのは、①契丹語で五は討 t<sup>h</sup>au である。②中期モンゴル語で五は tabun である。③現代のモンゴル諸語は tabun に由来すると考えて矛盾は無いという 3 点です。契丹語が tabu > tau と変化したとする根拠はありません。

山村健一：佐藤さんが言いたいのは、契丹語の 5 は “もともと” tau であったと考えても良いということですね。tabu > tau という道筋を考えることができるなら同じ程度に tau > tau という道筋を考えることができるということでしょうか。

tau > tau (契丹語)

tabu > tabu (モンゴル祖語)

安井教授：このあたりが漢字音訳契丹語を使った議論の限界でしょうか。先に進みましょう。

## 賽咿呢 (月) 検討

山村健一：賽咿呢 (月) の近世音は sai-i-ri です。契丹語としては sair でしょうか。モンゴル諸語とツングース諸語は次のとおりです。

■現代モンゴル諸語：ハルハ方言 cap (sar)。チャハル方言 sar。バーリン方言 sar。ブリヤート語 harə。ハムニガン語 hara。カルムイク語 sar。ダグール語 sar。シラ・ユグル語 sara。モンゴオル語 sara。サンタ (ドゥンジャン) 語 sara。バオアン語 sara。カンジャ語 sara。

<sup>21</sup> このような推定は、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于寶林・邢復禮(1985) 『契丹小字研究』北京：中國社會科學出版社の 110 頁にみえる。

中期モンゴル語：（元朝秘史）撒<sup>ᠰ</sup>刺（sara）。

中期モンゴル語：（パスパ字碑文）z-r（zara）。

■現代ツングース諸語：赫哲語 **bia**。鄂倫春語 **bEEag** と **bEE**（五月などの月）。鄂  
温克語 **bEEgǎ** と **bEE**（五月などの月）。錫伯語 **bia**。

満洲語文語：**biya**。

女真館訳語の女真語：必阿（**bia** 又は **biya**）

佐藤久美：賽<sup>ᠰ</sup>咄（月）**sair** も、ほぼモンゴル諸語と同形ですね。ところで、ブリヤート語の **harə** とハムニガン語の **hara** は、他のモンゴル諸語と異なっていますが、これはどういうことでしょうか。

山村健一：ブリヤート語とハムニガン語の **ha** は、他の単語をみると、モンゴル諸語の **sa** に規則的に対応しています。この2言語では後代に **sa** > **ha** という変化が起こったのでしょ<sup>う</sup>22。

## 最後に

安井教授：今回は、墮<sup>ᠲ</sup>瑰（門）、討（五）、賽<sup>ᠰ</sup>咄（月）という3種の契丹語を検討しました。どの様な感想を持ちましたか。

佐藤久美：契丹語の門を意味する墮<sup>ᠲ</sup>瑰 **tuo-kuəi** が印象に残りました。

- ①契丹語「墮<sup>ᠲ</sup>瑰（門）」**tuo-kuəi** はモンゴル諸語にない単語。
- ②女真語に **duka**（門）がある。
- ③満洲語文語には **duka**（城門など）と **uche(ufə)**（家の門など）の2種がある。
- ④現代ツングース諸語の門は、満洲語文語の **uche(ufə)** に対応する語である。

以上によって、女真語の **duka** は女真人が文化的な語として契丹語から借用し、満洲語文語に伝えたということは納得できます。契丹語の墮<sup>ᠲ</sup>瑰（門）は、モンゴル諸語ともツングース諸語とも一致しないことになるわけですが、そうするとこの単語はどこから来たのでしょうか。もう少し範囲を広げて探してみようと思います。

山村健一：討（五）**tau** がおもしろいですね。一つは、**tabu** > **tau** かそれとも **tau** > **tau** かという問題。もう一つは、もしも **tabu** > **tau** であり後代の変化が契丹語に起こ

---

<sup>22</sup> Svantesson (2005; 2008)による。‘good’ Hlh:saiŋ, Cha:seŋ, Baa:seŋ, Bur:hain, Kmn:hain, Klm:sen, Dag:sain, ShY:sein, Mgr:sain, San:sei-, Bon:saj, KJ:seini, Mog:soin. ‘beard’ Hlh:saxəɟ, Cha: saxəl, Baa: saxəl, Bur: haxəl, Kmn: hak<sup>h</sup>al, Klm:saxl, Dag:sakəl, ShY: sakal, Mgr:sqal, San:sqaŋ, Bon:saxal, KJ:---, Mog:sacal.



っているとしたら、ほかにも後代の変化を先取りするようなことが起きているかもしれないという問題です。

安井教授：いましばらく漢字音訳契丹語の検討を続けます。今日はこのくらいにしておきましょう。